

瓜破天神社 祭神 素盞鳴尊 菅原道真 平維盛

社伝 『船戸録（元文元年 1736）によれば、孝徳天皇の大化年中（645～649）、高僧船氏道昭**が、五月晦日三蜜の教法観念の折、庵室に光る天神の尊像が現れたので、西瓜を破って靈前に供えた。道昭は朝廷に上申したところ方八丁の宮地を賜り、この靈像を祭祀して、氏神と崇め奉り西の宮又は八丁の宮と称したのが当社の起源とする。当社の北部に牛頭天王を祀る社（祭神素盞鳴尊起源 鎮座年月不詳）があり、北の宮と言われていた。慶長年代（1596～1614）に至り公命によって北の宮を西の宮へ合祀した。寛永年間（1624～1643）に耕作の都合で集団移住し西川村（旧西瓜破）を形成し、そこに氏神として祀った。天満宮（祭神 菅原道真）さらに東北部に東の宮と称した小松大明神（祭神 平維盛）があった。』

『この社は寿永年間（1182～1183）に重盛に大恩を受けた源氏の武将湯浅七郎兵衛宗光が京都守護職として赴く際に、当地にて重盛が嫡子維盛が熊野浦にて入水の由を聞き及び追悼慰霊を営み神領五十歩を寄進して宮居を建てたのが起源とされる。』

『その後、当地本郷地、村民の熱意によって現今の地に勧請され氏神となる。以上の各社、社領地は特に永正より大永年間（1504～1527）に亘る足利と細川の摂津河内の戦乱に被害を受けたが、村民は維持、興隆に努めてきた。明治43年には公命により各社は当天神に合祀され昭和の時代に村民の希望により、再び各社に分霊鎮座された。』

**僧道昭は河内を本拠とする渡来人船氏の出身で、第二次遣唐使（白雉四年 653）で入唐し、インド帰って活躍していた玄奘三蔵に師事した。法相宗や禪を学ぶ。斉明七年（661）に帰朝。多くの経論を請来する。社会事業に尽くす。文武四年（700）没す。遺言により火葬、火葬のはじまりとなる。出所：「遣唐使」 東野治 岩波新書 2007 「遣唐使」 森克己 至文堂 昭和41年